

① 禅宗の成立過程について菩提達摩、慧可の実像や祖統説に新たな知見がもたらされる今、第四祖道信(580-651)と初期禅宗の運動を「禅定論」ではなく、六朝仏教以来の「成仏論」の発展として理解することを提案する。

② 道信「一行三昧」の課題

『楞伽師資記』道信章(『入道安心要方便法門』)の検討

道信章冒頭に『楞伽經』諸仏心第一と『文殊説般若經』一行三昧を明言するが、

道信の一行三昧は、直ちに常坐三昧(智顛・『文殊説般若經』)には収斂しない。

むしろ、『楞伽師資記』の一行三昧は「坐禅為主」(玄曠・求那跋陀羅、弘忍等)と、道信「随自意三昧(智顛・非行非坐)」の立場で齟齬を生んでいる。

これはどう理解できるか。

道信『入道安心要方便法門』は、東山法門の北上(玄曠707-9?)によって北地に将来された。その伝承の古さは修正を許さない権威を具え、道信章は古形を留めた。それ対して淨覺は「坐禅為主」の立場から前後を拡充するかたちで祖師伝が増補され、『楞伽師資記』が成立した。

齟齬とは、道信は「四威儀禅定」であり、北上した東山法門の「坐禅為主」は道信の本義(随自意三昧)の修正であるという意味である。

一方、道信「一行三昧」の本義(随自意三昧)を継承するのが『敦煌壇經(原形)』「一行三昧」で、以下神会、『証道歌』『禅門經』『頓悟要門』等の「四威儀禅定」の系譜が指摘できる。これは大乘起信論の一行三昧説(止・觀・止觀双運)、智顛「四種三昧」との関連分析も必要となるだろう。

③『敦煌壇經』の一行三昧と心地無相戒

『敦煌壇經』の一行三昧が道信を継承しているならば、同様に「心地無相戒」もまた道信思想に遡行できる可能性がある。

道信教団のもう一つの集団原理は僧俗一貫の「梵網單受菩薩戒」である。

道信教団とは、菩薩戒(心地無相戒)受戒者の集団であり、『敦煌壇經』『曹溪大師伝』等は、慧能の伝記的記述や、受戒後の自省自悟の奨励、菩薩戒自誓自受の記録など、菩薩戒と菩薩戒集団という道信以来の集団原理の実際のありさまを保存している(一定の隠蔽を伴って・後述)と理解できる。この菩薩戒は生産労働を可能にすると同時に、「仏位」(『梵網經』)の宣言は「仏即覺義」の個々の「個体的実現」である「頓悟」思想を根拠づけた。

菩薩戒自誓自受の觀仏受戒と重なりつつ、見性成仏説に変容するのである。

④ 道信教団の二つの構成原理。

道信教団には菩薩戒と随自意三昧という二つの集団原理が想定できた。

菩薩戒によって可能となった生産労働の現場は、そのまま一行三昧「随自意三昧」の道場となった。作務、労働を始め、行住坐臥のあらゆる行為は三昧としての意味(証悟の契機)を獲得した。

その後の歴史経過は、道信「随自意三昧」を「坐禪為主」に最初に修正したのが北上した東山法門(北宗)であり、むしろ『敦煌壇經』は道信復古という正統回帰を掲げる批判者として登場し、南宗原理となった。

これら菩薩戒や随自意三昧に代表される思想成分からは、南嶽慧思、天台智顛を始め、南朝仏教(所謂禪宗以前の禪思想)の検討があらためて必要である。道信の初期禪宗とは南朝系仏教の最終的到達点でもある。

⑤ 結語 人間とは何か 「仏即覚義」の「個体的実現」

菩薩戒と随自意三昧を集団原理とする道信教団は、六朝仏教「義学」の深い成熟を前提にして登場することが可能となった。

「仏とは覚の義なり」これを実現する二原理が菩薩戒(覚の根拠)と随自意三昧(方法)であった。この二原理は、六朝以来の涅槃經・梵網經研究といった菩薩戒思想の成熟と、個々人々の実存的課題として「覚」を捉えるに至った禪定思想の成熟を背景とする。

禪の成仏とは、菩薩戒受戒(仏位)の具体的事実を根拠にした「覚(見仏性)」の「個体的実現」である「是心是仏」(『観經』)の確証であった。

<補説> 菩薩戒集団を出自とする禪宗が持つ菩薩戒(仏性戒)の要素は、隠蔽・修正・分解・忘却の歴史過程をたどって、菩薩戒集団から瑜伽戒(具足戒)出家教団へ、梵網単受菩薩戒から兼受菩薩戒へ、唐宋の禪宗の性格にも対応する変容を見せる。

このような禪宗の歴史は中国中世仏教の克服運動といえるが、依然、中世仏教克服の「完遂態」であったかどうか、あらためて問うことはできる。